テンプス

２０１０年（平成 22 年）43 号

和泉葛城山ブナ林

も　く　じ

和泉葛城山ブナ林
願泉寺の修理事業、終了間近
平成 22 年度貝塚市郷土資料展示室特別展のお知らせ
貝塚御坊願泉寺と平成の大修理
孝恩寺の仏像　－如来像①　釈迦如来坐像－
古文書をひも解く
古文書講座
貝塚市の風景～ユニチカ株式会社貝塚工場跡～

和泉葛城山ブナ林

和泉葛城山山頂にあるブナ林は、標高 800 mを越える山頂北斜面に貝塚市・岸和田市域合わせて約８ha に広がる原生林です。

ブナ林は、中部地方以北や日本海側に広く分布していますが、太平洋側ではもともと分布が狭く、1,000 m程度の山で見られるのが普通です。

ところが和泉葛城山のブナ林は、太平洋側で位置的にも南限に近く、しかも低い山で群生しているなど他の地域には見られない条件をもつことから、大正 12（1923）年に国の天然記念物に指定されました。当時は幹直径 30cm 以上のブナが約 1,800 本あったとされています。

近年、ブナの大木が次々と枯れ、林内に後継樹がほとんど見られないなどブナ林の衰退が著しく、さらには地球温暖化の影響もあり和泉葛城山のブナ林が絶滅する危険性が懸念されるようになりました。

そうした中、貝塚市・岸和田市・大阪みどりのトラスト協会では、学識経験者の指導のもと、ブナ林周辺のバッファゾーン（緩衝樹林帯）において、ブナやシデ等の落葉広葉樹の植栽やブナの種子採集と稚苗の養成、バッファゾーンおよび植樹造林地の森林育成・ブナの毎木調査・巡視管理など、ブナ林保全のためのさまざまな活動を実施しています。

ブナ林で採集した種子から発芽した苗は岸和田市塔原（とのはら）にある苗畑に移殖し、バッファゾーンに他の広葉樹とともに植え付けを行いました。現在までに 2,444 本の苗が植栽されています。しかし、平成 12 年度に採集して以来、ここ数年、ブナ林での種子採集はできない状況がつづいています。

苗畑のようす（岸和田市塔原）
ブナ林で採集された種子は、苗畑で数年間育てた後、バッファゾーンに植えられます。

バッファゾーンに植えたブナの苗

和泉葛城山の山なみ（岸和田市塔原より）

ブナ林内のようす

信仰に守られたブナ林

和泉葛城山は、奈良時代に役小角（えんのおづぬ、役行者）が開いた葛城修験道場として信仰を集めてきました。伝説によれば、享保年間（1716 ～ 36）に岸和田藩主岡部氏が狩りに来山した時、白鹿を射殺したところたちまち雷鳴がとどろき豪雨となりました。そこで岡部氏は巨石で社殿を造り、葛城一言主命（ひとことぬしのみこと）と八大龍王を祀って山を鎮めたと伝えられています。以来、山頂にある高靇（たかおかみ）神社は五ヶ庄（現在の岸和田市域の河合、相川〈そうがわ〉、塔原と貝塚市域の木積〈こつみ〉、蕎原〈そぶら〉）地域の郷社とされ、とくに雨の神として信仰されてきました。

高靇神社の社殿

現在では7月18日、8月25日、9月22日に祭礼が行われています。

このように和泉葛城山は、信仰の対象として五ヶ庄の村の人々によって守られてきました。信仰により守られた山であったからこそブナ林は守り伝えられてきたのです。

ブナ林は保水力が高く天然のダムと呼ばれています。降った雨は林内に蓄えられ、緩やかに沢に集まり川となります。このようなすばらしい自然は、大阪府内でも貴重なものであり、守り伝えていく必要があります。

落ち葉の積もったようす
ブナ以外のいろいろな種類の葉が積もっています。

ブナの種子の抜け殻
落ち葉といっしょに埋もれて、種子が残っているものは、自然に発芽するものもあります。

ブナ林内の沢のようす

願泉寺の修理事業、終了間近

平成 16 年度から約 7 年間かけて行われています重要文化財願泉寺本堂他 5 棟半解体修理事業は、事業終了に向けて修理作業が大詰めを迎えています。本堂、表門、鐘楼（しょうろう）は修理用の素屋根（すやね）が取り除かれ、北築地塀、南築地塀、目隠塀（めかくしべい）は数年ぶりに復元され、修理を終えたそれぞれの建造物の姿を直接見ることができるようになりました。今後は、本堂内部の修理や境内の整備などが進められ、平成 22 年 12 月をもって全ての修理事業は終了します。次号のテンプスでは、この修理事業の終了を記念して特集記事を掲載する予定です。

本堂

表門

鐘楼

北築地塀と太鼓堂

目隠塀

平成 22 年度貝塚市郷土資料展示室特別展のお知らせ

貝塚御坊願泉寺と平成の大修理

本展では、貝塚寺内の中心寺院である貝塚御坊願泉寺の寺宝と、平成 22 年 12 月をもって終了する重要文化財建造物の修理事業の概要について、関係資料や写真資料をもとに紹介します。

願泉寺本堂内部

会　　期：平成 23 年２月５日（土）～３月 27 日（日）
会　　場：貝塚市郷土資料展示室（貝塚市民図書館２階）
開室時間：午前９時 30 分～午後５時
観 覧 料：無料
休 室 日：毎火曜日、２月 11 日（金・祝）、
２月 17 日（木）～３月１日（火）（市民図書館の特別整理休館）、３月 21 日（月・祝）

孝恩寺の仏像　－如来像①　釈迦如来坐像－

貝塚市木積（こつみ）の孝恩寺には、平安時代の制作で地方色豊かな 19 躯（く）の仏像が安置されており、うち 18 躯が重要文化財に指定されています。今回は、如来像のうち釈迦如来像を紹介します。如来は修業によって悟りの境地に達して仏となったもので、頭部が隆起した「肉髻」（にっけい）や額の巻き毛「白毫」（びゃくごう）など 32 の身体的特徴を持っています。もともと如来は、仏教の開祖である釈迦如来のみでしたが、仏教が広まっていくなかで阿弥陀如来や薬師如来などの複数の如来が生み出されました。

【重要文化財】木造 釈迦如来坐像　１躯

時　　代　平安時代後期
像　　高　89.0cm
指定年月日　大正２（1913）年４月 14 日

釈迦如来は、仏教の開祖である釈迦族（古代インドの地方の一部族）の王子「ゴータマ・シッダールタ」が悟りをひらいて仏となった姿です。

本像は、衲衣（のうえ）という一枚衣を偏袒右肩（へんたうけん：右肩をあらわにする着衣の形）に着し、右手は施無畏印（せむいいん：掌を正面にした手を上げる形）とし、左手は掌を上にして膝上に置き、右足を上に結跏趺座（けっかふざ：座禅を組んだときの足組みの形）する像です。

製作技法は一木造で、頭部および体部をカヤと思われる一木で彫り出し、坐像のため膝部は別材でつくられ、はぎ合わされています。また、後頭部、背面部、そして像底から内刳り（うちぐり：乾燥による干割れを防ぎ、重量を軽くするために内部を刳りぬくこと）をほどこし、空洞部分を隠すために後頭部と背面部には蓋板があてられています。

体部の奥行きが薄く、膝の高さも低くつくられるなど、全体的に量感を強調する傾向が少ないのが本像の特徴です。右肩や膝前にみられる翻波式衣文（ほんぱしきえもん：大波と小波を交互にあらわしたような木彫像の衣の表現）は浅く彫られ、本像の製作が 10 世紀代であることを示しています。また、像底からの内刳りが大きく、膝部の別材を腹部に刳り込むという 10 世紀後半以降に見られる技法を使用していることから、本像の製作期は 10 世紀後半以降と考えられます。

なお、本像の左手の形は薬壺を持つかのような形をしていることから、釈迦如来ではなく薬師如来の可能性があるのではないかという指摘があります。また現在、文殊菩薩立像と普賢菩薩立像を脇侍（きょうじ）として収蔵庫内に安置されていますが、この両像は本来天部像であるため、この三像は釈迦三尊として当初からセットで製作されたものではありません。

古文書をひも解く

◆願泉寺にのこる秀吉からの禁制

「秀吉禁制」①

禁制（きんぜい）とは、禁止令のことで、戦国時代には寺社などが戦いに巻き込まれないように有力な武将にお願いして、戦いに巻き込まないことを約束したものです。願泉寺には羽柴（のちの豊臣）秀吉が貝塚寺内に宛てて出したものがあり、日付の異なる三通が現存しています。

古いと思われる順では、天正 11（1583）年５月付けで出された「秀吉禁制」①が最初の禁制です。「筑前守」（ちくぜんのかみ）（＝羽柴秀吉）から「和泉国貝塚寺内」に宛てられています。秀吉は天正 10（1582）年６月に織田信長が本能寺の変で倒れると、翌年４月柴田勝家を賤ヶ岳（しずがたけ）の戦いで破り、北庄（きたのしょう）城で自害に追い込みました。そして近江長浜へ帰ってきた際、願泉寺卜半家の初代である卜半斎了珍が秀吉の戦勝を祝って駆けつけ、この禁制を貰い受けたとの伝承がある史料です。

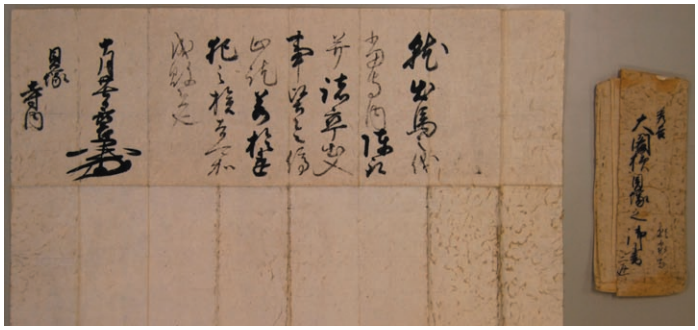
内容は、軍勢の乱暴狼藉（らんぼうろうぜき）や陣取のほか、民衆に対して迷惑をかける行為を貝塚寺内でおこなうことを禁止しています。このことは、寺内を戦いに巻き込まないように、味方の軍勢に知らせることを意味しています。

次に、10 月 27 日付けで「秀吉」から「貝塚寺内」に宛てて出された「秀吉禁制」②は、天正 12（1584）年のものと推定されています。ちょうど、秀吉と徳川家康が小牧・長久手で相争い、その後の膠着（こうちゃく）状態のなか、家康と結び秀吉包囲網を形成していた根来・雑賀衆（ねごろ・さいかしゅう）のいる紀州を攻めるという風聞から、発給されたものと考えられています。しかし、実際にはこの時秀吉は、紀州攻めをおこなわず、紀州に対する威嚇（いかく）に過ぎなかったと位置付けられています。

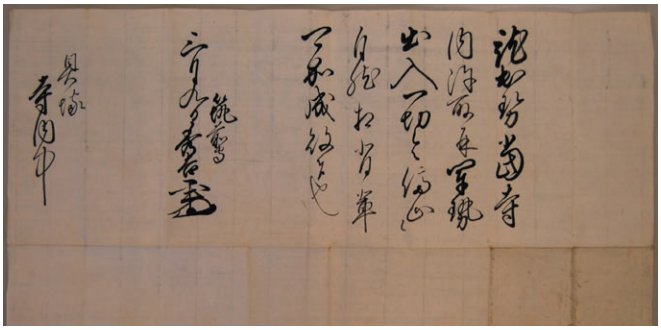
内容は、出陣に際して、貝塚寺内での陣取や軍勢の出入りを禁じており、非戦闘地域として位置付けられたと思われます。

最後に、３月９日付けで「筑前守秀吉」から「貝塚寺内中」に宛てて出された「秀吉禁制」③は、天正 13（1585）年のものと推定されています。この禁制は紀州攻めで貝塚周辺で戦闘がはじまる３月 21 日から 10 日あまり前に出された史料です。内容は、前の史料とほぼ同じです。

こうした史料は、天正 11（1583）年７月から天正 13（1585）年８月までの“貝塚”本願寺時代を含め、貝塚寺内は秀吉と敵対せず、むしろ良好な関係を築いていたことを示すもので、天下統一を目指す時の権力との対立を避け、その後の宗派や町の発展を守ったと言えるでしょう。



「秀吉禁制」②



「秀吉禁制」③

古文書講座

◆「江戸時代の天災―地震・雷・火事…―」

平成22年9月25日（土）から5回にわたり、「江戸時代の天災―地震・雷・火事…―」と題して古文書講座を開催しました。

江戸時代に起こったさまざまな天災に関する記録をもとに、地震や火事などが発生した時、人びとはどのように行動し、幕府や藩はどのような対応を取ったのかを明らかにしました。地震については、嘉永7年（1854年＝地震の発生により安政元年に改められる）に近畿地方で観測された安政伊賀上野地震・安政東海地震・安政南海地震の三つの地震の様子を書き留めた史料を取り上げ、貝塚における被害の様子を読み解いていきました。また、火事については、その発生原因を突き止めようとする岸和田藩の目附（めつけ）・郷役の取り調べや、藩を越えて堺奉行に火事の報告をおこなうなど、その対応のあり様を確認しました。

講座の参加者からは、「時代背景や郷土史を解説して頂いて講義の内容が大変面白いです。」といった感想のほか、今後取り上げてほしいテーマとして「江戸時代の庶民の暮らしぶり、武士の暮らしぶり」や「文化史的な内容もしていただけるとありがたいです。」などの希望が寄せられました。

◆古文書講座（第35回）開催のお知らせ

「卜半斎了珍と願泉寺」

願泉寺本堂ほかの半解体修理事業が終了するのにあわせて、初代卜半斎了珍と貝塚御坊願泉寺にまつわる古文書を取り上げ、願泉寺の成り立ちを明らかにしていきます。

日　　時：平成23年1月15日－第1回、1月22日－第2回、
1月29日－第3回、2月5日－第4回、2月12日－第5回、
いずれも土曜日午後2時～4時30分

場　　所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

申　　込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・Eメール・FAX・電話いずれかで、下記まで事前にお申込みください。

連絡先　〒597-8585　貝塚市畠中1丁目12－1（貝塚市民図書館2階）　貝塚市郷土資料室
TEL　072（433）7205　／　FAX　072（433）7107
E mail：shiryoushitsu@city.kaizuka.lg.jp

貝塚市の風景

～ユニチカ株式会社貝塚工場跡～

昭和40年後半の貝塚工場空撮（ユニチカ記念館所蔵）

日ごろ目にする何気ないまちの風景も、いろいろな部分で日々変化しています。今回はユニチカ株式会社（旧大日本紡績株式会社・ニチボー株式会社）貝塚工場跡を紹介します。

昭和９（1934）年に当時の貝塚町が将来の大産業都市を実現するために、大日本紡績株式会社を誘致し、翌年から貝塚工場が操業しました。当時は、“東洋一”と称された大工場で、1960年代には「東洋の魔女」ニチボー貝塚バレーボールチームとして一躍有名になりましたが、平成９年３月に60年に及ぶ操業を停止しました。

貝塚工場旧体育館での練習風景
（「東洋の魔女」ニチボー貝塚）

平成８（1996）年の貝塚工場正門前

貝塚市歴史展示館

現在の工場地はユニチカ株式会社貝塚事業所の社宅や研修センター・ＪＶＡナショナルトレーニングセンターなどが残る一画を除くと、大部分が戸建住宅やショッピングセンターに変貌しています。

事務所と工場の中庭は市が寄贈を受け、平成17年10月１日より、市民庭園と貝塚市歴史展示館として公開しています。

現在の貝塚工場跡（市民庭園入口より）

広告募集中

50mm × 80mm（最終ページ）　１枠
50mm × 175mm（２～７ページ）　６枠

詳しくは社会教育課文化財担当までお問合せください。

かいづか文化財だよりテンプス 43 号

平成22年11月30日発行
貝塚市教育委員会
〒597-8585　貝塚市畠中１丁目17－１
Tel（072）433-7126　Fax（072）433-7107
Email:shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp
印　刷：㈱帯谷印刷所
※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。
年４回発行：各1,000部
印刷単価：　48.09円